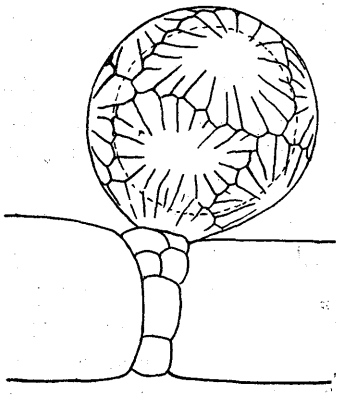
**○ 車軸藻類ノート (2)** (加崎英男) Hideo KASAKI: Miscellany on Charophyta (2).

**3. ホシツリモの雄器の発見** On the antheridium of *Nitellopsis* in Japan

*Nitellopsis* は特異な越冬芽である stars をもち，通常はもっぱらこれにより栄養生殖が行わなれているためか，有性生殖器官である生卵器，藏精器の形成は極めて稀である。筆者は芦の湖で，これも 2 年越しで未熟生卵器をもつ 1 個体を漸く発見して以来，fertile の個体を求めつづけて来たが，その後河口湖で可成り成熟した生卵器を得たのみで (本誌 **32** (4): 125)，雄器については遂に見出されぬまま今日に至つた。

*Nitellopsis* の産地としては，その後芦の湖，河口湖・山中湖に次いで，32 年秋更に野尻湖を新に加え得たが，この際得られた材料も同様 sterile であつた。したがって，わが国の *Nitellopsis* は ♀ 器のみしか作らず，Parthenogenesis でも行なつているのではないかとの想像さえせざるを得ない状態にあつたのである。



*Nitellopsis* の雄器 ×30.

所で本年秋，更に野尻湖の植生を再検討すべく調査を行なった所，9 月 22 日大房剛，大西一博両君の採集した材料の中より雄器をつけた個体を発見し，漸くこの疑問も解決できた。雄器は図のような形状で，輪生小枝の何れの node にもつき，単生で内向きである。直径は 1000～1050$\mu$ 内外もあり，他の多くの *Chara*, *Nitella* が 300$\mu$ 前後，特に大きな種類でも *Nitella flexilis* で 600$\mu$, *Chara corallina* で 700$\mu$ 迄であることと比較する時，如何に大きなものであるかがうかがえる。雄器の node とのつき方が直接的で，柄細胞をもたないことは注目すべき点であるが，この点を含めて細部の形態的な問題は目下検討中なので稿を改めたい。何れにしてもこの材料は，雄器の形状，大きさからやはり *Nitellopsis obtusa* の記載と一致するように思える。(東京都立大学理学部生物学教室)

**○ オクエゾサイシン** (水島 正美) Masami MIZUSHIMA: On *Asiasarum heterotropoides* F. Maek.

菊地政雄氏の報文 (八幡平調査研究，第 1 報，1952 年) により，本種が陸中の八幡平 (ハチマンタイ) まで南下していたことが明確になつた。これは前川教授が説かれた頃の資料 (本誌 24 巻 92-93 頁，1949 年) たる「津軽半島の一部に達している」事実より南の産地である。同半島は 40°50′ N から 41°16′ N に亘り，菊地氏の採集地は 39°57′ N に当る。小生は 1956 年に同じく陸中の岩手郡鳥帽子嶽—三角山 (ミカドヤ

マ）39°48′ N で採集している。ところが盛岡市在住の安本広静氏は本種を和賀郡の焼石嶽 39°10′ N で採られた（1957 年 8 月 7 日の採品）。即ちオクエゾサイシンの南限は同山であり，津軽半島より直線距離で 200 km 強だけ南下していることになる。

問題はやゝ離れるが，南下するオクエゾサイシンと北上するウスバサイシンとを水平的に区切った津軽海峡の成立は何時頃か？前川教授はこれを鮮新世末か洪積世初頭であろうとされた。即ち近海での最大の海退を示したギュンツ氷期にかゝる頃に当り，以降を通じて陸化したことがないという御見解と解し得る。まず津軽海峡の海底地形を見よう。渡島半島西腕の白神岬と津軽半島突端の竜飛（タッピ）崎とをつなぐ南北の海嶺が約 130 m の深さに存し，これが最浅部であるらしい。一方ずつと時代を降つてリス氷期には 150–200 m 位の，ヴュルム氷期には 100–80 m 位の海面降下があつたとされている。此の数値からすれば，洪積世初期に陸地の沈降を伴わぬ限り海峡は成立し得ず，リス氷期には北海道と本州との間に陸橋が存在したことになり，最後のヴュルム氷期には狭くとも海峡は成立したことになる。即ち津軽海峡の成立は数 10 万年前のものではなく，洪積世末約 5 万年前のものであろうと考えることが出来る。地質学の資料もヴュルム氷期には海峡の存在を肯定するが，洪積世前半に既に存していたとは受け難い。ヴュルム氷期頃の海峡が幅狭いものであつたにせよ，サイシン類の如く虫によつて種子の撒布が行われるらしい植物には分布阻止の十分な壁であつたに違いない。

オオシラビソ林（シラビソ帯）を有する東北地方の山々には多分広くオクエゾサイシンが分布しており，ブナ林（ブナ帯）の上限の辺にまでは降下生育していると十分考えられる。これに対しウスバサイシンはブナ林を本拠としてミズナラ林（クリ帯上部）にまで下降しており，正に本州北端部に到達している。而も小生の知る北部のウスバサイシンはホッコクウスバサイシン（*Asiasarum Sieboldi* F. Maek. var. *pubinerve* F. Maek.）として分化している。これは有毛の点でオクエゾサイシンに近くなつたものと見るべきであろうか？又現在の乏しい知識では奥羽山脈の海抜 800–1000 m に両者の垂直的境界があるものと見られる。然し津軽半島では北東部の丸屋形岳（718 m）が最高で，此の半島部は気候的にオクエゾサイシンの生育を許すのであろう。（東京都立大学牧野標本館）

---

□ 今関六也：**原色キノコ**　ポケット版 200 図共計 231 頁　発行所 三省堂　定価 450 円

戦時中発行された同名の書の生れ替りであるが原図はすべて新しく書き更められ，図も解説も単に作られたものではなく著者の体験からにじみ出たものである。オールアートの刷りは上乗，配列にも心がくばられてある。茸狩りの際にポケットにしのばせるに好適であるが，またお茶でも飲みながらぱらぱらめくるのも楽しそうだ。（小林義雄）